

中上級学習者指導の留意点 ー実は難しい初級で習った文法と語彙  
小林典子（元 筑波大学教授）

はじめに

今回の研修では、学習者の習得困難な日本語文法として、(1) 時間のとらえ方 (テンス・アスペクト)、(2) 動作主のとらえ方、(3) ノダ文について、そして、語彙教育として (4) コロケーションの指導の4つのテーマを取り上げました。文法で取り上げた3つのテーマは重要な課題であるにもかかわらず、教育現場では取り扱いが難しいと感じられているものです。学習者が文法形式の持つ意味に気付くように、どのような例文の提示や練習問題が有効かを、研修参加者には直接体感してもらいたいと思い、また、それらの練習問題をご自身の学生に向かって役立ててもらうことも考え、練習問題を実際にやってみました。時間的制約で、グループ内の意見交換時間が十分にとれなかったことは残念でしたが、それぞれの練習のポイントは何かを考え、中国語母語話者の学習者にどのように説明したらいいか、どのような練習がいいか考えてほしいと思います。(練習問題は、『中上級日本語文法試作版』小林典子・フォード丹羽順子他から引用し再構成したものです。)

#### 1. 時間のとらえ方 (テンス・アスペクト)

学習者に提示するとき、(1) 形式からの指導 (ル・テイル・タ・テイタ形式はそれぞれどのように使用するか) (2) 過去、現在、未来のとらえ方からの指導 (話者の視点と事態の実現時との関係から、ル・テイル・タ・テイタのどの形式を選択するか) (3) 中国語の時間表現に対応させながらの指導、などが考えられます。(1)の方法は文法書などの記述によくあります。今回の研修では、(2)の方法を取りました。私には(3)は分かりませんし、(1)による学習効果に疑問を持っているからです。

時間で切り取る世界を、4つに分けて提示しました。過去、現在、未来、それと、具体的な時と関係のない「超時間」です。

##### 1. 1 「超時間」(具体的な現実の時間とは無関係な場合)

次の1)は「超時間」で、時とは無関係、いつでも真実です。2)は、「今、現在」の現実です。

- 1) 平地で水は100度で沸騰する。
- 2) あっ、お湯が沸騰している。火をとめなきや。

次の3)は習慣となった決まりごとの内容項目リストを提示する目的で、時の意識がない「超時間」であるのに対して、4)は「今現在」どのような状況かを伝える目的で言う場合です。このような場合はテイルが使われます。

- 3) 毎日、まず、ラジオを聞きます、それから、起きて、朝食を食べます。
- 4) 最近よく布団の中でラジオを聞いています。それから、起きて朝食を食べています。

【まとめの図】を参照しながら、説明します。 は、今現在の話者の立場（視点）を示しています。この目が過去の事態をとらえるときは②、現在をとらえるときは④～⑧、未来の事態をとらえるときは⑨となります。色のついた方の目  は、話者の視点が過去のある時点、あるいは、未来のある時点に立って、「その時点での現在」をとらえています。③は過去のテイタ、⑩は未来のテイルです。この③や⑩は、学習者にとって、分かりにくいものようです。例えば、次のような対立的な文例を見てください。5) は過去のある事柄（模型の制作）全体を話題にしています。それに対して、6) は「夜中の2時に視点を置いて、その時点を現在としてその時の状況を述べる表現です。

5) A : このビルの模型はだれが作ったんですか。

B : 私が徹夜で作ったんです。

6) A : 夜中の2時ごろ電気がついていたけど、何をしていたの。

B : この模型を徹夜で作っていたんです。

現在の行為や状態を述べる形式は、多様です。基本的にはテイルです。④は現在進行中ですから、分かりやすいのですが、⑦や⑧のテイルは、過去に事態が発生し、その結果が事実として残っている状態です。⑦は「お金が落ちている」のような現在も目に見える状態で存在しています。⑧は目に見える状態は現在は何もありますが、過去の事実を今現在と関連付けて経歴として述べるときに使います。例えば、「母が子供のとき台北に住んでいるから、私は台北に特別な感情がある。」と、現在のことと関連づけて言う場合には、このテイルを使うのです。

テイルは継続している行為や状態や経歴を現在時点で部分的に切り取る表現のように感じます。一方、行為や状態を丸ごと全体としてとらえた場合は、過去のことはタ、未来のことはルになります。

⑤のルというのは、状態を表す動詞や形容詞のことです。次のような動詞は、テイルにしないで現在の状態を示すものです。

ある、いる、可能形、～たい、～すぎる、思う、感心する、思われる、感じられる、見える、聞こえる、(匂い/音) がする、など

⑥のタは、今現在の状況の中で使うものです。何かを待っていたり、探していたりしていて、それが実現した瞬間に「来た」「あった」と使います。

ここまでは、主文の述語について、述べましたが、複文の従属節では、他の異なる規則があります。研修では、1) 「～と言う」、「～と思う」、などの引用節の場合、2) 「とき、前、あと」などのトキ節、名詞修飾節、「から、ために」などの理由節などを少し取りあげました。例えば以下のような例文です。

7) 彼はすぐ帰ってくると言ったが、翌朝まで帰ってこなかった。

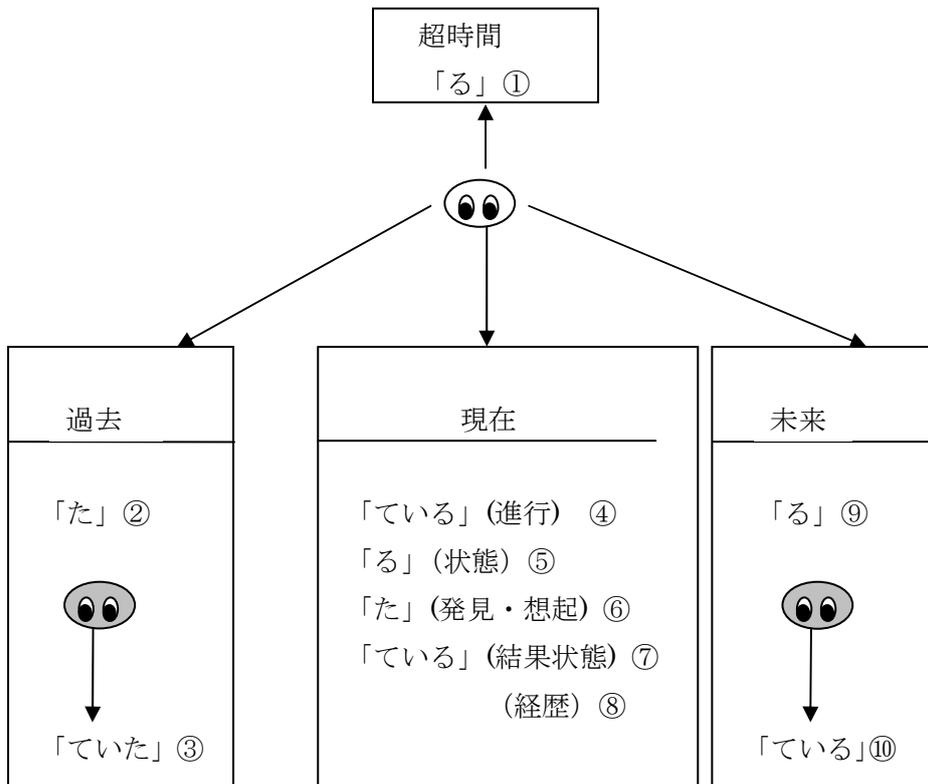
8) ライトをつけたまま駐車している車がある。

9) 汚れるから本にカバーをかける。

10) 汚れたから本にカバーをかける。

どの文法項目でも大切なことは、9) 10) で示したように、対立的に問題を構成してその意味を考えることで文法が持っている意味を気付かせることです。

【まとめの図】「る・た・ている・ていた」 — 主文の述語の場合



(下線の番号は上の図の番号に対応します。)

去年の夏、私は図書館で毎日研究のための資料を②探した。おかげで資料が②そろった。その頃、弟は予備校に③通っていた。今、弟は⑤大学生だ。私は家で論文を④まとめている。でも、うまく行かず、⑦落ち込んでいる。いつも私は家に⑤いるが、弟はバイトで⑤忙しい。弟はコンピュータが得意で、高校の時にもバイトで⑧稼いでいる。コンピュータに強いと、バイトがたくさん①ある。来年の夏から私は⑨留学する。来年の今頃は海外で⑩過ごしている。弟は何を⑩しているだろうか。

2. 動作主のとらえ方

主語を明示しないことが多い日本語は、述語形式から「私」のことか、「他の人」のことかが分かる仕組みになっています。人称を頼りにして動作主を知るのではなく、述語から動作主を知る練習も重要です。

## 2. 1方向、授受、受身、使役

ある動作が「私」と「他の人」に関係する場合、方向（テクルの有無）授受（テクレル、テモラウの有無）、受身、使役などで、誰が行為者なのか分かります。

例えば、「電話をかけた」のような「私」と「他の人（相手）」が登場する行為の場合、人称がなくても、行為をした人は「私」だとわかります。逆に「電話をかけてくれた」「電話をかけてきた」「電話をかけられた（受身）」の行為は「他の人」によるものです。このような誰かが誰かに何かをするという方向を伴う動詞の場合に、本動詞だけの場合は、普通は、動作主は「私」です。「他の人 A」→「他の人 B」という場合の動作主は、視点のおかれた「他の人 A」です。言いかえると、「私」の気持ちは「他の人 A」の領域に立っています。11)、12) では太郎の立場に話し手（「私」）は視点を置いています。

11) (太郎は) 先生に電話をかけた。

12) 先生は (太郎に) 電話をかけてくれた。

練習として、次のようなものも有効です。

<練習例> 次の動作は、だれが、だれにしたものか。話者＝「私」

どちらか、選んでください。

1. 連絡した： (私→他の人) (他の人→私)
2. 連絡してきた： (私→他の人) (他の人→私)
3. 連絡してくれた： (私→他の人) (他の人→私)
4. 質問してきた： (私→他の人) (他の人→私)
5. 質問された： (私→他の人) (他の人→私)

テクレル、テモラウや受身などでは話し手の感情も含まれています。受益ととらえて喜んでいるか、不利益を不快に思っているかについても、表現されます。普通、受益のほうはテクレル、テモラウを付けて積極的に表現します。不利益については、中立的にテクルで言う場合もありますし、もっと明瞭に受身で不快感を表現する場合もあります。事実関係だけでなく、感情も同時に表現しているのです。

## 2. 2 感情、感覚、思考

心の内面のことをどう表現するか、その表現形式によっても、動作主（この場合は、そう思っているのは誰か）が分かります。基本は次の（1）（2）です。

（1）他の人の心の中は分からない。そのため、他の人の内面について語るときは、伝聞や推量の表現が必要になる。

（2）自分の行動は自分の意志でコントロールできる。また、自分の感覚や感情も分かる。

そのため、自分で決定できる意志的行為に「はずだ、にちがいない」のような推量の表現は使わない。

例えば、「彼は寒い。」「彼はうれしい。」のように日常の会話では言えません。代わり

に、「寒そうだ。」「うれしいらしい。」「うれしそうだ。」「うれしいにちがいない。」などと、言います。また、「思う。」は「(私は) 思う。」という意味で、「(他の人は) 思う。」ではありません。「思っている。」であれば、「私」の場合も「他の人」の場合も使います。次の例は、だれがその動詞の主体なのかを考えさせる練習問題です。人称はありませんが、「私」のことなのか、「他の人」なのかは明確です。

<練習例> 下線部分の主語は「私」なのか「他」なのか考えなさい。

1. 結婚して ほしいと思っている にちがいないけど、まだ独身でいたいと思う。
2. もう寝ているだろうと思って、電話しなかった。
3. もう寝ているだろうと思って、電話して来なかったんだって。
4. うるさいからテレビを消して ほしいけど、楽しそうに見ているから、がまんしよう。

## 2. 3 敬語

尊敬語や謙譲語によって、誰が動作主なのかが分かります。

尊敬語： お持ちになる いらっしゃる 来られる (動作主=他の人)

謙譲語： お持ちする いただく 伺う (動作主=私)

敬語は、人間関係の上下や距離間を反映するシステムですが、人称のない世界では、誰の動作かを示す機能も担っていることを重視するべきだと思います。次の練習例は敬語に注目して動作主を判断する練習問題です。(研修会場では、「安心された」を受身と思った人がいましたが、これは受身敬語で、尊敬語です。)

<練習例> 下線部分の主語は「私」なのか「他」なのか考えなさい。

1. 研修会の準備を手伝ってくれる人がいないと困っていらしかった。それで、お手伝いすると申し出たら、とてもお喜びになって、安心された。
2. 荷物が重そうだったので、お持ちしましょうと声をかけた。

## 3. ノダ文をどのように教えるか

ノダ文を使わなければ自然な日本語を話すことができませんが、これをどう教えればいいのか、学習者にどのように文法説明をすればいいのかは日本語教師の悩むところです。学習者の能力レベルにあわせて、少しずつ学ばせていきます。

### 3. 1 初級では会話表現の定型表現を導入する

初級では、定型的な表現を使用しながらノダ文を学ばせることが多いですが、やはり学習者としては、文法的な意味を知らないままだと不安に感じるでしょう。そこで、ノダのある場合と、ない場合を対立的に示してその違いを説明すると少し分かった気がして、不安感が取り除かれるように思います。

13) a. 郵便局に行きますか。            b. 郵便局に行くんですか。

例文 13) a では、話者は手紙をだれか郵便局に行く人に出してきてもらいたいと考え、聞き手に質問しています。聞き手（受け手）は、「はい」「いいえ」の答えをします。つまり、受けてが「行くか、行かないか」が知りたい場合の表現です。それに対して 13) b では、話者は聞き手が郵便局に行くことを何らかの方法で既に分かっています。分かっていることを確認するために聞いています。分かっていることを聞かれているのですから、聞き手はさらに情報を加えて例えば「母に手紙を出すんです」のように応答するわけです。

14) a. 何か飲みたいです。

          b. 何か飲みたいんですけど。

14) a と b を比べてみると、a は幼稚な表現に感じます。また、b は相手に対応を依頼している感じがします。「んですけど」には、相手に働きかける機能があるからです。つまり、「んですけど」がない a の場合は、相手は自分に依頼されていると感じません。

このように、ノダの文法を少し説明した後は、次のような定型表現を使用した練習をするといいでしょう。

「～たいんですが。」（例 ちょっと教えてほしいんですが。）

「(前置き) ～のことなんですが。」（例 あしたの授業のことなんですが。）

「疑問詞～んですか。」（例 どうして休むんですか。どうしたんですか。など）

### 3. 2 中上級では、否定と推量の scope（作用域）について取り上げる

文中のどの部分を否定しているのか、あるいは、推量しているのか、というようなことが「ノ」があるかないかで大きく異なります。中級以上になったら、ノダのそのような機能について指導する必要があります。

15) a そのかばんは大きいから買わなかった。

          b そのかばんはおおきいから買ったのではない。

15) a で否定しているのは、直前の動詞「買う」です。この人は、「買わなかった」のです。しかし、b で否定しているのは「大きいから買った」です。このように「の」が付くと否定の作用する範囲が広がるのです。そして、その作用域の中の焦点部分、つまり「大きいから」を否定します。この場合は、この人はかばんを買いました。その理由は大きいからではなくて、別の理由（例えば安かった）で買ったと述べているのです。

16) a 寒さのために枯れたかもしれない。

          b 寒さのために枯れたのかもしれない。

16) a については、「かもしれない」と推量している部分は直前の「枯れた」です。この人は外の植木鉢のことを心配していますが、見ておらず、「枯れたかもしれない」と言ってい

ます。これに対して、bはどうでしょうか。「寒さのために枯れた」を推量しています。先に述べたように、この中の焦点部分「寒さのために」を推量しているわけです。この人は外の植木鉢が枯れたことを知っています。そして、その原因を推量しているのです。

#### 4. コロケーションの指導

コロケーションというのは一般には二つ以上の語でよく組み合わせて使われるものを言っています。日常よく使用されているにもかかわらず、系統だった学習の機会が少ないように感じます。例えば、「顔を立てる」「目が高い」「話に乗る」など、個々の単語は基本的なものです。組み合わせさった意味は学習者には分かりにくいものかもしれません。単語が易しいものであるために、辞書で確かめず、誤解してしまっているという場合もあるかもしれません。読解や聴解などで出てきたときに取り上げるのはもちろん、一つの単語から系統立てていろいろな表現に広げていく教材もありますから、授業に取り込んでみたらどうでしょうか。

#### 5. おわりに

時間的、空間的、心的にものごとをどう認識し、どう表現するかということは、文法の根幹の部分で、本稿の数ページには、とても納まりきれません。それでも、研修で、これをテーマとしたのは、日本語教師がもっとも教え方に困っている文法であり、学習者もまた、誤用の多いところだと思ったからです。具体的にどのように指導したらいいかのヒントが何か少しでも見つかることを願っています。そして、中国語母語教師だからこそできる一番適切な教え方をぜひ研究してもらいたいと思います。

#### 参考文献

- 庵高功雄、松岡弘他 2000 『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
小野正樹、小林典子、長谷川守寿 2009 『コロケーションで増やす表現』くろしお出版  
小林典子、フォード丹羽順子他 『中上級日本語文法試作版』筑波大学留学生センター